

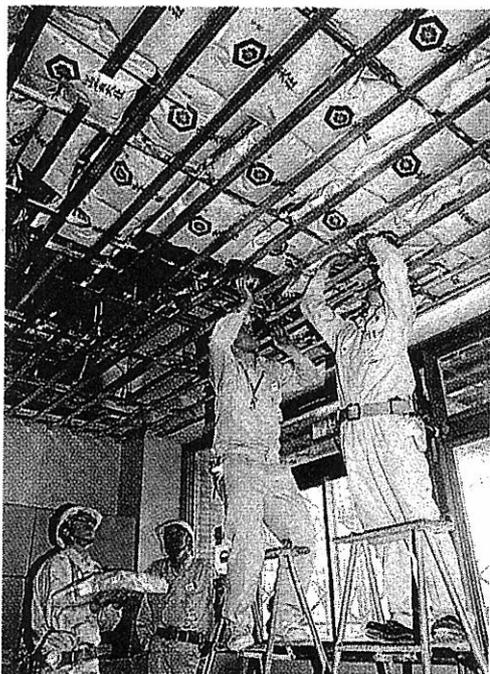
## 出雲大社の摂社→ 島大付属病院へ

# 檜皮を病棟調湿材に

平成の大遷宮の修繕工事が進む出雲大社(出雲市大社町)の摂社の一つ、天前社(あまさきのやし)の屋根を覆っていた檜皮(ひわだ)が、炭に加工され、島根大医学部付属病院(同市塩冶町)の新病棟の調湿材として再利用されることになった。天前社の女神は古事記の記述から「看護の神様」ともいえ、病院関係者は檜皮による癒やし効果も期待している。

和ケアセンターと個室専用階にある計34室で、調湿や防かびの効果がある炭の利用を計画。出雲大社の檜皮の一部が炭にされることを知った小林祥泰病院長が、「看護の神様」が祭られる天前社の檜皮の提供を依頼した。贈呈式では千家尊祐司が、島根大の山本広基学長と小林病院長に目録と炭を手渡し、大学側か

天前社の屋根にふかれていた檜皮(奥)と、加工された炭



檜皮から作った炭の袋を天井裏に敷き詰める作業員—出雲市塩冶町、島根大医学部付属病院新病棟

## 炭に加工贈呈 「ご加護願う」

出雲大社で14日、贈呈式があり、同大社の御神紋が記された45センチ四方の不織布に入った炭袋3130個が贈られた。同病棟では早速、炭袋の設置作業が始まった。

天前社に祭られる蛸貝比売命(きさがいひめ)の

ら感謝状が贈られた。千家宮司は「先人が伝えてきた古材が生かされ、役に立つことができばうれしい」と話した。

この後、新病棟で炭袋の設置が始まり、5階の特別個室(広さ34平方メートル)では天井裏に180袋がぎっしりと並べられた。小林病院長は「檜皮炭の調湿効果に加え、看護の神様のご加護を願っている。壁には和紙を張り癒やしの環境を整えたい」と喜び、作業を見守った。